

夢を叶えた模型屋さん

「もけいや松原」は、松原では今は珍しい模型屋だ。商品の「販売」と「製作」、ニーズに合わせて「改造」も行う。

お客さんの大半は男性だが最近女性も増えてきているそうだ。なかには、現役の電車の車掌さんもある。

「お客さんの意見を取り入れてきたからこそ、今がある」

店主の巽さんは、一人でお店を切り盛りする。

「こんな楽しい仕事、他人に任せられへん。それにお客さんは僕を信頼して来てくれる、それにも応えんと」と言う顔は、誇りに満ちている。

巽さんが鉄道模型を始めたのは、小学5年生の時のブルートレインブームがきっかけだ。初めて買ってもらった模型は今でも大切にしている。松原生まれの松原育ち。昔から近鉄電車が見える場所でお店をするのが夢だった。

「定年後にと考えてたけど、ちょうどタイミング



が合って。思い切って店を始めたんです」
自動車会社やラジコン店など、それまでの仕事は全て今に活かされてる。
鉄道模型の魅力は「鉄道」を自分で所有し運転できることだという。今はなき幻の電車も走らせることができる。

「鉄道だけは、お金がいくらあっても個人で持たれへん。だから限りなく本物に近いものを追求するんやと思う」

本物を追求し、模型は「おもちゃ」を超える。

巽さんの「相棒」は毎日更新しているブログ。これを見て遠方から、海外の人さえ来店する。

「お客さんあつての店なんで、相棒はお客さんと言いたいところやけど、それやとかつこつけすぎやから」と照れる姿が印象的だった。

大手ではできないニーズに応えること、店そのものが出会いや交流の場になることが仕事のやりがいだ。好きで始めた仕事なので悩みはない。素敵だと思っ

た。私もそう言える大人になりたい。

文 山田真里江(二年)

「お客さんあつての店なんで、相棒はお客さんと言いたいところやけど、それやとかつこつけすぎやから」と照れる姿が印象的だった。

大手ではできないニーズに応えること、店そのものが出会いや交流の場になることが仕事のやりがいだ。好きで始めた仕事なので悩みはない。素敵だと思っ

た。私もそう言える大人になりたい。

文 山田真里江(二年)



あなたの相棒

人間誰しも、大切な人・物・場所があるはず…。府立生野高校写真部と一緒に、そんな誰かのかけがえのない「相棒」を紹介します。第6回目は、上田で「もけいや松原」を営む巽唯邦さんです。